

漢法苞徳塾資料	No. 540
区分	講演
タイトル	日本伝統鍼灸学会改称にあたり3つの原点を想う
著者	八木素萌
作成日	1996年 『鍼灸 OSAKA』 vol.12 No.4 (1996. Wint.)

1. 改称のねらい

日本経絡学会は昨秋（1996年）の年次総会（第24回学術大会に平行して登録会員により恒例で開かれる）で「日本伝統鍼灸学会」と改称することが決定された。その理由として執行部は、およそ次のように説明した。

- ①近20年の鍼灸学術の発展を見ると「経絡治療」以外にも、古典に立脚した多くの鍼灸学術の研究・教育団体が結成され発展してきている。
- ②「鍼灸における、“証”について」を主題とした学会討論の過程（16回以来）で「日本の古典派といわれるほとんどの研究・教育団体が、日本経絡学会に共同して相互に切磋琢磨しあい発展しようとする」ようになってきた。
- ③この討論の過程で「今後の日本の鍼灸医術に求められる方向」が、日本経絡学会の果たす役割とともに明らかになってきた。
- ④今やこれらの多くの団体が「大同団結」して日本の伝統鍼灸の流れを太く充実させるべき時期にきている。
- ⑤故に、「日本の経絡学会という枠を外してより大きな流れを促すべきとき」と思う。

というのである。

2. より一層の幅広さ

この決定は歓迎すべきものである。この「枠を外した」ことを契機に「相互に切磋琢磨しあい発展しようとする」「今後の日本の鍼灸に求められる方向」を迫っていくようにこの流れに未参加の「伝承」グループや「古典に立脚した」グループが合流されることを願うとともに、執行部が具体的に組織としての行動・接触によって、この「共同して切磋琢磨」していくことになるように、ねばり強く積極的な働きかけをするように、求めてやまないものである。討論の過程で「協力し交流していける」ようになったといえるような態度を明確にとった「団体」は、まだまだ少なかったといわなければならないからである。それは、例えば、昭和50年頃、4世神戸源蔵が、学生の求めに応じて、当時の伝統諸流をざっと紹介する講演を行ったが、そのとき「杉山真伝流」「流山流」「吉田流」「石坂流」「大須賀流」「西村流」「笹川流」「大久保流」「近喰村尾流」等の名が登場しており、

大正から昭和の初期にかけて関東で「幅をきかせていた」のが「杉山流」「吉田流」であった由であり、その他「匹地流」「意心流」「雲海士流」「柳川流」等、他の流派の名や若干のエピソード、各流が注文してくる鍼について等も講演している。今年の東洋鍼灸学園祭には「石坂流」演者の口演があった。このように伝統流派が存在しているのである。これらの諸流については、近年オリエント出版から相当部分の伝書が出版されたし、他社からは『夢分流』の伝書ほかも出版されているので、研究することは可能である。しかし鍼灸は「技」の要素が大切であるので、この部分については「口伝」もあり、伝承されていくもので、文書化し難い面に大切な問題もある。したがってこれら流派の人々からは是非とも、その技術を開示していただけるような努力も、執行部に強く望みたいものである。

3. 現実化へ……

「見切り発車」「バラック建て」として出発せざるを得なかったのが、昭和初期（主に10年～15年頃）の医療・鍼灸界の社会的状況であったとは、若干の著作や、その頃の出版物の復刻版などによって明らかにされていることである。「経絡治療」の「枠」とはどういうものであったかを、事実に基づいて検討し直さなければ、ただ学会の名称を変更しただけでは、「枠を外す」ということは不徹底とならざるを得ないだろう。

近年、常識的に語られている「経絡治療」のイメージは、初期に提起された多様性をもった「意識的に経絡を運用する」から「経絡的な治療なのだ」という草創期に提示されていたものとは、かなり差のあるイメージが行き渡っているように見える。従って初期に提示された姿は「見切り発車せざるを得なかった」「バラック建てであっても建てなければならなかった」ときの姿であるから、それを検討しなければならないであろう。

また、一般化しているイメージと、当初の姿との間には極めて大きな落差が見られるのみではなく、当初からの技術の重要なものが今日、忘れられている傾向も見られるので、この「技（わざ）」の側面も検討される必要がある。

経絡的な治療の「臨床医学」としての「診断から治療までの一貫したシステム」の提示に際して、これに極めて大きな影響を与え、また示唆をもたらした八木下翁（八木下勝之助）も、澤田流の始祖、澤田健師にも両者とも非常に似通ったエピソードが伝わっている。それは治療について講演を依頼されたとき、壇上に上がるや「経絡の調整につきる」とただひと口語って降壇して、この講演を設定した人々を啞然とさせたという話である。

同時に、「証討論」がもたらしているものについても考えておかなければならない。別な言い方をすれば、今後のために、これまでの結果を整理しなければならないのである。

これらの問題を具体的に論じることこそが大切であると思う。そして、それを行うことこそが「枠を外した」といえる内容を、自ら明らかに示すことであるように思う。いわば「キレイな絵を描い

た」でもこれが現実となるためには、運動論、展望、具体的な組織的展開という問題が、まだ残っていると言わなければならないのではあるまいか。

4. 3つの原点を……

残された紙数では、とてもこれらのすべてについて考えを述べることはできない。議論が百出して、なかなか収斂できないとき、雰囲気的なもので「流して」いく、「流れていく」中から「無手勝流」で行く先を求めるといふ、一つの対処の仕方があるだろう。しかし、これは「見切り発車」以上に、将来に悔いを残すことになるのではなかろうか？いまひとつの対処としては、原点に戻る、基本に立つ、出発の精神・理念にしっかりと立脚する、ということではないだろうか。

その原点の一つは、経絡治療の誕生までの一群の鍼灸家の姿の中に見出すことができるものである。その精神、その情熱、その技術等を土台にしてしっかりと生かし、受け継ぐべきであろう。

清朝の中・末期・中華民国（蔣政権）の頃、中国では鍼灸・漢方は、まさしく潰滅せんばかりであったし、特に灸は間違いなく潰滅してしまっていたことは歴史的事実である。一方、中国における鍼灸・漢方の再興に、日本の役割が極めて大きかったという歴史を思い起こすべきである。この日本の役割の上でも、当時の日本における漢方鍼灸の復興運動が、極めて大きな具体的な役割を果たしたのであり、特に鍼灸においては、経絡治療創始期の運動が果たした役割は大きかったのである。これらの事実は、歴史的な文献上にも色濃く刻印されていることは『漢方と漢薬』誌、『東亜医学』誌、初期『医道の日本』誌などに明らかである。

経絡治療創始期の考え方や技術などの内容は、次のような事実から十分に判断できるものと思う。

上地栄『昭和鍼灸の歳月』の中に、経絡治療の唱導に大きな役割を果たした竹山晋一郎師の次のような一文を、冒頭に掲載している。「吾々が『古典の再検討』を唱導しているのは、そのことによって鍼灸術本来の伝統を歴史的に同時に学術的に明らかにし、而して明治以後臨床的に全く無力のものとされてしまった斯術に『活』を入れて再び息を吹き返させ、臨床的効果をあげしめ得るものとせんがためである。鍼灸が単なる刺激療法ではなく、灸が単なる温熱的刺激療法や一種の蛋白体療法では決してないことは、古典を再検討し経絡経穴の正しい意義を知った者にとっては、臨床的にも学術的にも、今や明らかになったのである。補瀉の概念と経絡経穴の活用を除いて、鍼灸術は成立しないことは明らかである。……（略）……古典は近代西洋医学の知識により、それを尺度として解釈し説明しようとする限り決してその真の姿を現してはくれぬ。……」と。

別のところに「……井上恵理は『経絡治療とは、鍼灸術の本質を明らかにした名称である』とも書いた。柳谷素霊は昭和の初期に『古典に還れ』といい、古典に接する態度について『古典は古意を以て解せ、しかる後それを現代の意にしなければならぬ』と唱えた。……」とも記してある。

柳谷素霊師の門下には杉山流の管鍼法を主とする者、撚鍼法を主とする者、吉田流的にやや太目の長い鍼を主とする者、石坂流を標榜する者、打鍼を得意にする者あり等、杉山流的傾向が強いといっても、実に多彩・多様であるがいずれにせよ「鍼灸は鍼灸医学に基づいて」「古典の批判的摂取」などの呼び掛けに呼応して、反応点治療や家伝療法を越えて、臨床医術として鍼灸のもっている卓効の応汎性の驚威を「診断から治療までの一貫した臨床」システムとして実現化し把握しようとした人々であった。

原点の第二としては、今日、忘れられているかに見える重要手技を思い起こしてしっかりと受け継ぐことである。その1、2を言えば、例えば「脈診の際には、頭維の散鍼、または腹部の散鍼」をして、正しく脈がとれるということ、「脈診は脈状を六部において診るのが基本」とされてきたこと、これが「六部定位比較脈法」なる理解によって惨憺たるものに変容している。また、脈診至上主義を唱導したかのように解されている岡部素道師は、その絶筆『鍼灸治療の真髓』の中で「……証を決定するときに、例えば肺虚証とみるか肝虚証とみるか迷うことがあります、そのときは肺経・肝経をよく撮診してみて、どちらに強く異常が出ているかによって決定するのです。……」と書いている。その他、ツボを出す取穴手技や、深部の腹候の伝承手技も忘れられそうな現状は憂うべきことである。

原点の第三は「診病之始五決為紀、欲知其始先建其母……」（『素問』五藏生成第10）、「暮世之治病也則不然・治不本四時不知日月不審逆從……」（『素問』移精變氣論第13）等のような、五藏五行を弁別し、運氣を考え、逆從を審らかにして施治すべきであるという論は、さまざまな状況に応ずる治法や鍼法とともに『黄帝内経』の中に多数記述されている。これらは歴代の医書に、基本が継承され、また具体化されてきている。これを大切にすることであろう。